

# 内包された奥

面視認による認識領域のズレ

指導教員 吉松秀樹教授 印

7AEB3116 澁谷和馬

## 1. 問題意識「北千住のスキマロジ」

北千住の密集住宅群には、「路地とも隙間とも言い難い空間（スキマロジ）」があり（Fig.1）、「包まれる」感覚を持ち、奥へと誘われるという体験をする。この感覚の要因は何だろうか。



Fig.1 北千住のスキマロジ

## 2. 調査「スキマロジ・偶発的凸凹」

路地は人為的に出来た空間、隙間は偶発的に出来た空間であり、スキマロジは道のように使われている（≒路地）、偶発的な建物と建物の間（≒隙間）である（Fig.2）。よって、スキマロジは不規則な建物の建ち方から、偶発的な凸凹面を認識出来る（Fig.3）。

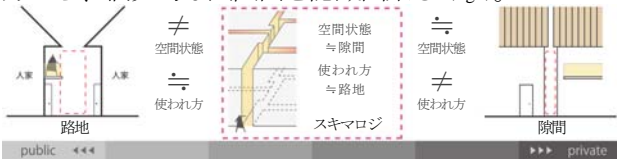


Fig.2 路地?スキマロジ?隙間

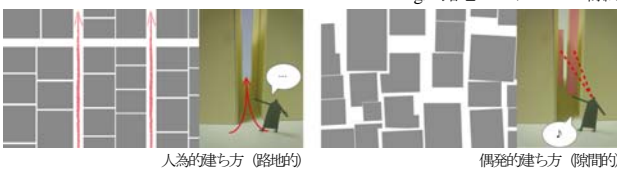


Fig.3 人為的・偶発的

## 3. 分析「認識面…“包”」

偶発的に出来た凸凹の認識面は視線を点々とさせることで、「障り」・「導き」を感じさせ（Fig.4）、実際の領域よりも広がりを持った領域を認識出来る。この「認識領域のズレ」が「包まれる」と感じる要因であると考え（Fig.5）。



Fig.4 認識面の障り・導き

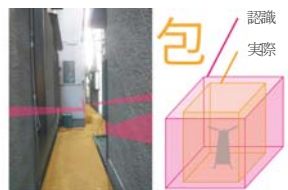


Fig.5 認識領域のズレ

## 4. 手法「面の結合・伸縮」

分析で得た「認識領域のズレ」を空間化する。対になる面の空間を結合させることで、認識面を作り出し、空間に相互意識を持たせる。また、結合面の伸縮や高さに差を与えることで、元々の空間を濁し、広がりを持たせる（Fig.6）。

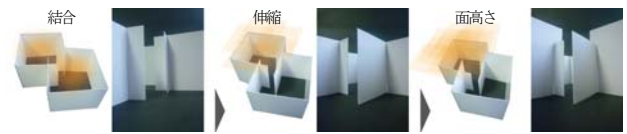


Fig.6 面空間の操作

## 5. 提案「包まれる住宅」

北千住のスキマロジから得た“包まれる”という感覚を、手法の「面の結合・伸縮」を用いて平屋住宅の設計をする（Fig.7）。

「認識領域のズレ」により、個室の結合構成なのに、ひと塊のような認識を持たせることで、個々の空間は常に周りの空間や人の気配を感じとり、全体を意識し、空間と空間、人と人との距離を縮めるような“包まれる”建築を提案する（Fig.8）。



Fig.7 Plan S=1/300



Fig.8 内観photo